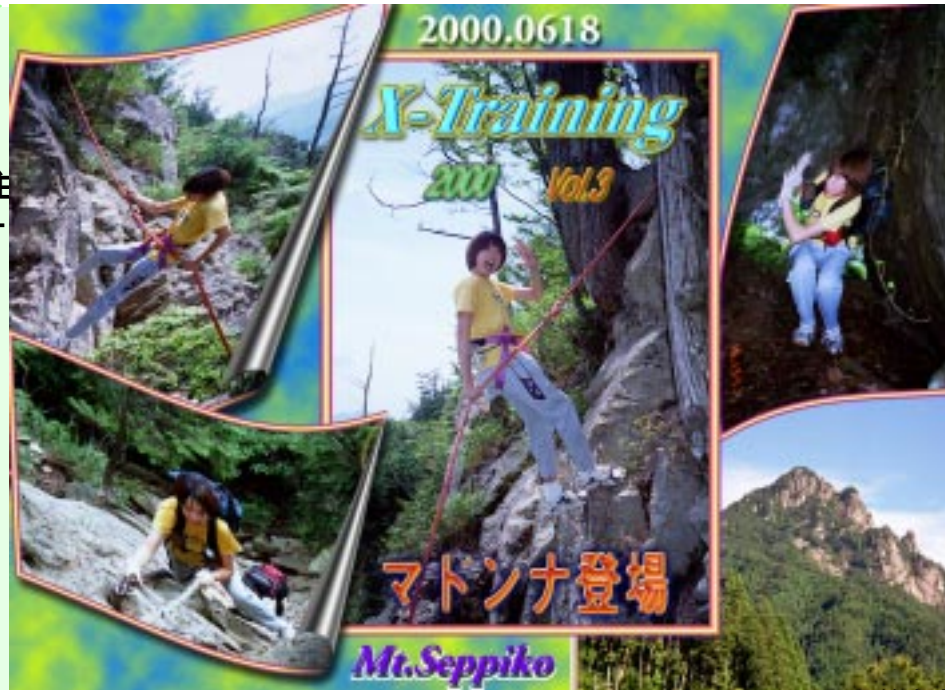


雪彦山

2000.6月18日

天候>曇/晴

メンバー>大塚賢一 45才、有末桂住
25才、福迫順一 37才、木倉博 37才



とうとう恐怖に岩場に到着。何も考えず勢いでよじ登ったら、大塚さんに「やるねー」とおだてられ単純な私はロープを使って岩場を降りる・・・私らしくない？体験までも足を震えさせながらチャレンジしていました。しかもカメラを向けられ「片手離してみい！」と言われ引きつった笑顔で手を振っている私は今から思えば間抜けずらだったでしょうね。

スリルな体験を終え少し登った所(山頂)できれいな景色を見下ろしながらみんなでパンをかじった時は、すごく充実感がありました、なんか大きな仕事をやり遂げたような・・・。

大塚さんは登って来る前からずっと「いい天気になった」とくしゃくしゃの笑顔でおられみんなに元気を与えられました(ジムでの真剣な顔からは想像もつかなかったです)。

再度歩き出し、さっきと違って平坦な林帯を越

え、鉾立山の山頂で待ちに待ったお昼をとることに。カップラーメンとおにぎりを頬張り楽しい話してくつろぎました、本当に下で食べるのとは大違いのおいしさでした。

あとは下山、ホッとしました。でも何か残念？な複雑な気持ちでした。どんどん下っていくと少し物足りなさを感じました。単調な下山道で少し退屈だった私に「大自然」が目飛び込んできました。自然に出来た大きな岩の洞窟、そこから勢いよくあふれ出す透き通った水。一つの大きなキャンパスに描かれた絵のような・・・、今でも脳裏に焼き付いて離れません。やはり「自然」ってすごい！。次回はこれを登りたいです・・・。しばらく下るとそこには早朝には誰もいなかった沢山の人が反対側から登ってきてやはり自然を味わっておられました。挨拶を交わしただけでも共感出来る人との出会いがすごく印象的で心地よかったです。天気も良く木漏れ日が雑木の葉にあたり一層の緑が息づき益々美しかった。

そしてもう間もなくゴールが近づき気が抜けたのか沢筋の岩に足を踏ん張ったのもつかの間、ズルッと滑り尻もちをついてピシヨピシヨ、何とも私らしいフィニッシュでした。



私が登山をするきっかけは大塚さんからの誘いからです。始めは軽い気持ちで「やってみようかなあ」、そこから少しですが興味が湧いてきました。でも「前日にやっぱり行くって言わなければよかった」とか、「明日は天気が悪そうだ！、中止かも？」なんて思ったりいつもの臆病な性格が出て前夜は仕事も遅かったせいもあり寝付けませんでした・・・。と、思ったら朝が来て約束の時間6時半に大塚さんと合い雪彦山へ・・・。今日のメンバーの木倉さん、福迫さんと合流しました。始めてお会いしたお二人だったので、気さくに話して頂き緊張が少し和らぎました。ふと目にしたのは高く急な大きな岩山。新人である私には足がすくむほどでした。私は3番目で必死に歩いて知らず知らずに皆さんのペースに流されるように足を運んでいました。前に行く木倉さんの足元を見て一步一步踏みしめて登って行きました。息切れはするし何度となく苦しい斜面はあったけれど時々、大塚さんが足を止めて話しを私に振って下さり、何と言っても大塚さんのリュックに付いた鈴の音がサポートしてくれて気持ちが持ちこたえられました。

ついに現れた「マドンナ」。我々の期待に多いに応えてくれて今後が楽しみである。この桂住嬢は、私を通してジムのイントラで、細身で私より背も高く見かけはキャシャだが、外見と中身は大違いで、雪彦山のいきなりの急登もなんのそので我々のスピードに付いてくる。またロープアクティビティーの懸垂下降も、ピレってはいれるものの必要事項や注意事項を素直に聞き入れて見事にこなしてしまつたのには一同舌を巻いてしまった。これからは楽しみである。今回は次回に行くシャワークライミングも兼ねての視察で全山縦走をした。途中で沢を視察しているときも、全然怖がらず、「次回はここを登ろうか？」「???、ハイ！やりたいです」となかなかの好奇心旺盛で先が楽しみである。ちなみに、次に日は筋肉痛はあるか？と聞くと、「いえ全然ありません」と・・・力強い言葉が返ってきた。

今回の反省点では、トップブレイが二人とも全然で、クライマーともども滑落のおそれがあるので、もっとATCの使い方を勉強しなければならない。